

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370252

研究課題名(和文)西鶴の文芸の総合的研究

研究課題名(英文)A general study on the literary works of Saikaku

研究代表者

水谷 隆之(MIZUTANI, Takayuki)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：60454500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：元禄期の西鶴の俳諧における付合の手法を解析し、宗因風と元禄俳諧とを接続する西鶴の創作意識・方法について考察した。
西鶴の町人物浮世草子の特徴を明確化したうえで、後続の浮世草子がそれを踏襲しつつ作者独自の工夫や趣向を加えていく一方、次第に類型化していく商人像の特徴を具体的に示した。
中世から近世にかけての古典注釈学をふまえたうえで、それを享受した西鶴作を中心とする近世の諸作品を新たに読み解き、それらの従来の解釈を改め、文学史に位置づけた。

研究成果の概要(英文)：I analyzed the original method of Haikai of Saikaku in the Genroku era period. Based on it, I considered consciousness and a method of Saikaku who connected Danrin-haikai to Genroku-haikai.
I pointed out concretely that Ukiyo-zoshi about the merchant class after Saikaku were added the author's original ingenuity and idea, but that the merchant image gradually patterned in the process.
And I analyzed newly the parody works mainly on those of Saikaku and changed conventional interpretation of those by reading and understanding ancient commentaries of "Ise Monogatari" "Genji Monogatari" from the Medieval Period to the early-modern times.

研究分野：日本近世文学

キーワード：日本近世文学 井原西鶴 浮世草子 俳諧 古典注釈

1. 研究開始当初の背景

浮世草子と俳諧は密接に関係しており、特に西鶴の浮世草子は俳諧の素養に基づいて創作され、俳諧の手法や趣向が多く採り入れられている。しかしながら両分野の関係を見据えた研究はこれまで十分にはなされていない。

西鶴の俳諧については、乾裕幸氏による一連の論考(『初期俳諧の展開』桜楓社、1968、『俳諧師西鶴』前田書店、1979等)があるが、西鶴晩年の俳諧に関する研究はまだまだ少なく、なお検討を要する課題が少なくない。

西鶴の浮世草子については、従来多くの研究者により調査・分析が積み重ねられてきているが、西鶴が晩年に俳諧活動を再開した経緯や浮世草子と俳諧の関係、出版書肆や俳諧師たちの交流関係およびそれらが相互に与えた影響関係についてなど、未解決の問題が多く残されている。

また、俳諧ならびに浮世草子には多くの古典作品が利用されている。当時の古典学についての研究は嘗々となされ、近年とみに進展してもいるが、その俗文芸への影響についての研究は未だ本格的にはなされておらず、重要な研究課題となっている。

2. 研究の目的

研究代表者は、浮世草子・俳諧・古典注釈学・出版メディアなど、近世のみならず後代の日本文化を形成するうえでも重要な役割を担った文芸諸ジャンルの研究を行い、それらの関連を明らかにし、日本文化の特質を立体的に浮かび上がらせることを目的としている。うち、「西鶴の文芸の総合的研究」と題して行う本研究においては、井原西鶴の俳諧と浮世草子を対象に、文芸諸ジャンルに互る多角的な視座のもと、広範かつ精密な調査・分析を行い、それら一方についてのみでは不十分であった各研究を相互に補完、相対化しつつ、従来未解決のまま残されてきた西鶴およびその周辺の文芸に関する種々の問題を解明して元禄期の日本文学の特質を浮き彫りにする。

3. 研究の方法

(1) 元禄期の西鶴の俳諧について、付合の方法を分析して解釈を行い、その特徴を明確にする。これにより、元禄俳諧や蕉風俳諧との類似点・相違点を浮かび上がらせ、俳諧史に新たに位置づける。

(2) 当時の古典注釈学をふまえ、俳諧虚実説・寓言説を軸に俳諧と浮世草子にみられる古典受容のありさまを精査し、俳諧と浮世草子の発想方法や内容の関連性を指摘する。

(3) 西鶴およびそれ以後の浮世草子の展開

のさまを追うとともに、それぞれを相対化して文学史上に位置づける。

4. 研究成果

西鶴の俳諧について調査・分析し、その成果の一部を論文「元禄の西鶴の俳諧 当流と意味」(『国語と国文学』92巻6号、2015年6月)として発表した。本論文では、西鶴が俳諧において句の「意味」について言及した全ての例を検討し、宗因風と元禄俳諧との関係について考察した。西鶴が「意味ふくむ」と評した宗因風の俳諧は、句の表面に記されていないことがら詞の背景に想起される句作りであり、したがってそれは、談林の飛躍的な詞の連想や「ぬけ」の手法にも、固定的な付物を除き「意味を専らに付る」(『日本行脚文集』)元禄の疎句俳諧にも、同じく適用して矛盾しない俳諧であった。一方、とくに元禄期に西鶴が「意味」の深浅を問うた例では、詞に託されているべきはずの「意味」が、一句そのものの内容や背景に深みや膨らみをもたらしているかどうか問題とされており、前句の詞に頼った詞付の範囲でなされた、以前の談林の「ぬけ」の句作りとは異なっている。これは談林由来の手法や創意を、元禄疎句俳諧の作法にあわせて発展的に適用したものと考えられる。

西鶴およびそれ以降の町人物浮世草子について調査・検討し、「日本近世小説における商人像の形成と展開」と題して韓国高麗大学校において講演した。日本文学において本格的な経済小説を初めて創作したのは西鶴であり、その作品群はのちの文芸に多大な影響を与えている。そこで本発表ではまず、西鶴が描いた商人の特徴を概観し、近世経済小説の特徴を探る足掛かりとしたうえで、西鶴以後の町人物浮世草子に見られる、西鶴作との共通点と相違点を具体的に確認した。後続作には、西鶴作を踏襲しながらも各作者による新たな創意が加えられている。小説として様々な工夫や趣向が凝らされる一方、次第に類型化してゆく商人像の特徴について明らかにしたものである。

「近世前期小説の商人」と題した発表(韓国中国小説学会)では、貞享(1684-1687)から享保(1716-1735)にわたる町人物浮世草子を対象に、先行作を受容し新たな工夫をくわえて発展するさまを追った。勤勉刻苦し商売に励む商人たちの美德を従来の教訓に則って描く一方、そこから逸脱し金銭への執着から逃れられない人間の欲心をも暴き出し、詐欺小説など様々なジャンルを産みつつ展開する過程を具体的に示したものである。また、前述の高麗大学校での研究発表とあわせて、これを論文 The Formation and Development of the Merchant Image in the Novel of the First Term of the Early Modern Age in Japan: With Focus on Ukiyo-zoshi Written by Saikaku and Other Authors.

Korean Cultural Studies, 68, 2015 としてまとめた。

俳諧と浮世草子の研究成果を活かした大学での古典教育について、「俳諧と浮世草子の関係性」と題して発表し(韓国外国語大学校日本研究所国際シンポジウム)。これを論文「俳諧と浮世草子の関係性 西鶴作品を中心に」(『日本研究』68号、2015年6月)にまとめた。近世初期俳諧が「雅」と「俗」の二重構造をとり、さらに両者を接続する際には複雑ながらも様々な工夫や遊びがなされていることを確認し、そうした俳諧の方法や発想を用いて創作された西鶴浮世草子の解釈の方法とそこに込められた工夫および面白さを教示する方法について論じたものである。

古典学と浮世草子との関係については、西鶴の俳諧・浮世草子に関するこれまでの調査・分析結果にもとづき、とくにそれらに用いられた古典の古注釈書との関係に着目し、以下の研究成果を発表した。

「中世・近世の『伊勢物語』受容」と題した研究発表(於フランクフルト大学)では、『伊勢物語』二十四段を例に、国内外の資料を用いて中世絵巻・絵本における描かれ方を追ひ、近世の版本におけるその受容と展開のさまを示した。また一部の絵巻・絵本につき、当該期の古注釈書の理解をふまえて絵を読み解くことによって生まれる新たな解釈を提示した。さらに、『仁勢物語』『好色伊勢物語』『懐硯』『真実伊勢物語』等、近世における『伊勢物語』のパロディ作品に共通する特徴について考察し、古典注釈と俗文芸の関わりについて論じた。またこの成果をもとに、論文「中世・近世の『伊勢物語』 - 「梓弓」を例に - 」(『日本文学の展望を拓く 第四巻 文学史の時空』笠間書院、2017年11月)を執筆した。

論文「『好色一代男』巻四の二「形見の水櫛」考 - 『伊勢物語』古注釈との関係 - 」(『江戸の学問と文藝世界』、森話社、2018年2月)においては、『伊勢物語』第六段の当時の解釈をふまえることで、『好色一代男』巻四の二の新たな読解を試みた。

また、『源氏物語』空蝉巻を例に、中世から近世にかけての古注釈、絵巻、俗文芸との関係について考察する論文を執筆中である。

その他、本研究において得られた成果を取り込みつつ『浮世草子大事典』(笠間書院、2017年11月)9項目を執筆した。

以上、本研究期間中に発表した研究成果についてのみ報告したが、公表に至らなかった研究成果についても、追って論文として発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

水谷隆之「俳諧と浮世草子の関係性 西鶴作品を中心に」, 『日本研究』68号、査読有り、2016年、pp.79-94)

水谷隆之「元禄の西鶴の俳諧 当流と意味」, 『国語と国文学』92巻6号、査読有り、2015年、pp.36-51)

水谷隆之 The Formation and Development of the Merchant Image in the Novel of the First Term of the Early Modern Age in Japan: With Focus on Ukiyo-zoshi Written by Saikaku and Other Authors. *Korean Cultural Studies*, 68, 査読有り、2015年、pp.39-72)

[学会発表](計4件)

水谷隆之「中世・近世の『伊勢物語』受容 絵画と古注釈」, Tokugawa Meeting, 2015年、フランクフルト大学(ドイツ)

水谷隆之「俳諧と浮世草子の関係性 西鶴作品を中心に」, 韓国外国語大学校日本文化研究所国際シンポジウム「日本文学の研究と教育 韻文と散文のコラボレーションを中心に」, 2015年、韓国外国語大学校(韓国)

水谷隆之「近世前期小説の商人 西鶴およびそれ以後の浮世草子について」, 高麗大学校民族文化研究院「東アジア文明と韓国」企画チーム連続国際学術会議(1)・韓国中国小説学会夏季学術大会、2015年、高麗大学校(韓国)

水谷隆之「日本近世小説における商人像の形成と展開」, 高麗大学校民族文化研究院招聘講演、2015年、高麗大学校(韓国)

[図書](計2件)

水谷隆之「『好色一代男』巻四の二「形見の水櫛」考 - 『伊勢物語』古注釈との関係 - 」, 森話社、鈴木健一・杉田昌彦・田中康二・西田正宏・山下久夫編『江戸の学問と文藝世界』、2018年、328(91-109)

水谷隆之「中世・近世の『伊勢物語』 - 「梓弓」を例に - 」, 笠間書院、宮腰直人編『日本文学の展望を拓く 第四巻 文学史の時空』、2017年、460(54-59)

6. 研究組織

(1)研究代表者

水谷 隆之 (MIZUTANI, Takayuki)
立教大学・文学部・准教授

研究者番号：60454500